# 鉄道車両の色あれこれ

野田隆（のだ たかし）

一九五八（昭和三三）年にデビューした国鉄初の電車特急「こだま」（東京〜大阪、神戸）は、赤とクリームのツートンカラーであった。それまでの鉄道車両は、蒸気機関車の煤煙ゆえに黒や茶色といった地味な塗装のものが多かったから、こうした明るい塗装は画期的なものだと言える。その後、全国を走り回るようになったディーゼル特急も「こだま」と同じような塗り分けとなったから、国鉄の昼間の特急列車と言えば、赤とクリームというイメージができあがった。

ところで、この塗り分けは、日本だけのものではなかった。ヨーロッパにおいても、同時期、TEE（Trans Europe Express＝ヨーロッパ国際特急）という最高級の列車が、西欧において主要都市を縦横に結ぶネットワークをつくって運転を開始し、各国が用意した車両のスタンダードカラーは一部を除いて赤とクリームの塗り分けだった。洋の東西を問わず、特急列車というのは、派手な印象があるが、そうしたイメージにふさわしいのは赤とクリームなのだろう。

一九六四（昭和三九）年には、東海道新幹線が運転を開始したが、「ひかり」の車両である0系は、従来の特急塗装ではなく、濃紺と白の塗り分けとなった。もはや、一番汚れの目立つ白は鉄道車両の塗装としてタブーではなくなったのだ。それどころか、軽やかでスピード感のある色として、以後、積極的に使われていく。

今では、濃紺のかわりに他の色も使われているものの、白は高速列車には、なくてはならないカラーのようだ。これまた世界的な傾向で、ドイツの高速列車ICE（InterCity Express）の車体は、白がメインで、かろうじて赤がストライプとして用いられているにすぎない。九州新幹線「つばめ」も白がメインであるし、博多〜長崎を結ぶ特急「かもめ」も純白の塗装が眩しい。そういえば、航空機も白い機体のものが目につく。

今では、白は早い乗り物の象徴になったのだろうか。時代とともに、鉄道をはじめ乗り物のカラーリングは、より薄い色合いへと変わりつつあるように思われる。

プロフィール
1952年名古屋市生まれ。旅行作家。日本旅行作家協会理事。都立高校にて語学を担当するかたわら、ヨーロッパや日本各地の紀行エッセイや記事などを発表していたが、2010年4月よりフリーとして活動開始。
著書に『にっぽん鉄道100景』（2013年）『ヨーロッパ鉄道旅行の魅力』（2003年。以上、平凡社）、『定年からの鉄道ひとり旅』（2012年、洋泉社）など。

月刊 みんぱく
5月号目次

1 エッセイ　千字文
鉄道車両の色あれこれ
野田 隆

2 **特集**
**日本の文化**
3 ハレのかたち　ハレのこころ　笹原 亮二
4 「祭り」展示のマンダラ　中牧 弘允
5 メンドンと映像記録　福岡 正太
6 日々のくらし　日高 真吾
7 海とシオと魚とのくらし　川島 秀一
8 今に生きる山のくらし　池谷 和信
9 日本の民俗学コレクションとみんぱく　近藤 雅樹

10 似たモノさがし
罠――時空をこえた人類の知恵
野林 厚志

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
スクマ族の小さな世界
――タンザニアのスクマ博物館
小川 さやか

16 多文化をあきなう
ケニアの素材、日本の手仕事
石原 邦子

18 フィールドで考える
鈴木式ロクロのゆくえ
――福島県会津、丸物木地の工場から
木村 裕樹

20 人間学のキーワード
包摂
鈴木 紀

21 異聞逸聞
「人種のるつぼ」ふたたび
太田 心平

22 制服の世界、世界の制服
インドシナ民族衣装野外展覧会
樫永 真佐夫

24 次号予告・編集後記